Title	東北のハリストス正教会 : 一三ニ年前のニコライの旅を辿る (第二回東日本大震災国際神学シンポジウム : 分科会報告A)
Author(s)	山口, 陽一
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 121-124
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4922
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

分科会報告A

東北のハリストス正教会

――一三二年前のニコライの旅を辿る

山口陽一

三陸沿岸は、昔から今に至るまで宣教の「空白地」であると思われがちである。しかし、明治期にはハリストス正教会の活発な伝教がなされていた。そこを宣教の空白地にしてしまったのは近代の日本とプロテスタント宣教ではなかったか。そんな思いを抱きつつ一三二年前の宣教師ニコライの三陸沿岸の旅を辿ってみたい。

ハリストス正教会による伝教は、一八六九年に仙台から始まって周辺に広がり、一八七四年以降、盛岡から釜石街道を経由して沿岸部、また岩手県南部の山間地にもたらされた。一八七九年にハリストス正教会の信徒は四〇〇〇人、一八八九年には一万六〇〇〇人となる。この間、宣教師はわずか三人である。一方、プロテスタントは一八八三年からのリバイバルにより、八〇〇〇人だった信徒が一八九〇年には三万四〇〇〇人となっていた。

一八八一（明治一四）年五月一九日、東京を発ったニコライは七月まで東北を巡回する。プロテスタントの東北伝道はようやく始まったばかりだったが、正教会は仙台の五四五人をはじめ、白河以北の東北に二〇〇〇人をはるかに超える信徒を有していた。ニコライは花輪から三陸の宮古に至り、南下して（陸中）山田を訪れた。信徒が二三戸に五四

人、啓蒙者（洗礼志願者）三一人、ニコライは信徒の戸数を記す。山田では前年に火事があり、信徒約一五人の家が焼け、東京などの教会から援助金が届く。これに奮起した信徒たちは献金して聖堂を建て、一二年後の受洗者は一六三人となっている（二巻七〇―七一頁、三巻三一八頁）[1]。ところが、明治二九年の地震と大津波のため聖堂は焼失した。明治三〇年代後半に現在地に移転して歩みを続け、一九六五年には新会堂が成聖された。その聖堂が今回の津波で再び被災し焼失した。

大槌は二五戸に信徒四八人、啓蒙者一七人。大工の信徒を中心に自分たちで建てた聖堂の上には、真ん中に黒い十字を描いた一片の白い亜麻布が翻っていた（二巻七二―七三頁）。しかし、一二年後にニコライが訪れた時、教会は衰退していた。ニコライは「かれらが持っていた貧しく取るに足りないものを育てることができなかったわれわれに非があるのだ」、と日記に記している（三巻三一七頁）。

一八八一年の夏、ニコライは南下を続け、景色を楽しみながら釜石に到着した。ここには「完全に外国風に作られた巨大な施設」（鉄鉱石の精錬所）があり、信徒は二〇戸以上四八人、啓蒙者二五人。「日が暮れたので教会堂に赴き、晩課を行う。そのあと十字架に接吻をさせたのだが、みな煙管を吸うような音を立てていた」（二巻七六頁）。ニコライの日記は面白い。

ニコライは日本語のみならず、国史、儒教、神道、仏教、風俗習慣までを学び、国漢の読書力を習得した。こうした態度は、士族の英学修業に応えて米英の学術を教えたプロテスタント宣教師にはない特徴であった。

一八七二年二月一三日、仙台で迫害が起こり、沢辺琢磨は捕えられ入獄、処分を受けた者は一四〇余名に及んだ。最初の日本人教会である日本基督公会が成立した頃である。西に目を転ずると、潜伏をやめたカトリック信徒三三九四名が浦上四番崩れの迫害を耐え忍んでいた（六六二名が死亡）。国害とされたキリシタンとの違いを主張し、文明開化を牽引したプロテスタントは、殉教しない報国のキリスト教をめざした。

ニコライは、欧化主義を背景に教勢を拡大するプロテスタントに憤懣を隠さない。「日本はありとあらゆる分野で、プロテスタントとカトリックの国々の文明に魅了されてしまっている。（中略）いま、日本は、国家としての活動を盛んにするためのいわば資源として、外国の信仰を求めている。信仰でもそうなのだ。同じ目的のためには、ありとあらゆる現世の取引に適している非正教の教えのほうが、実際により役立つのだ。そこに正教の居場所はない」（一八八六年一一月三〇日「日記」）。このような正教を内村鑑三は高く評価する。「予がニコライ師に対して殊に敬服に耐へないのは、師が日本伝道を開始せられて以来、彼の新教派の宣教師の如く文明を利用することなく、赤裸々に最も露骨に基督を伝へた事である」（「美しき偉人の死」、『正教時報』大正二年二月一〇日号）。

ニコライは東北巡回の折りに訪れた仙台で、「メトリカはきちんと作っておくように、公会でよくよく言って聞かせる必要があるだろう。必ず印刷し、本のかたちにしておかねばならない」（一八八一年六月一日）。正教は世代を越えた家の宗教として伝えられ、メトリカ（教会籍簿）に基づいてパニヒダ（召天者のための祈り）を行う。パニヒダについては、私が在住する千葉県印西市での興味深い経験がある。当地でもごく早くから伝教が始まり一八七七年頃には教会が成立して会堂も建てられ、ニコライが一八九二年に巡回した折には七八人の信徒がいた。しかし、残念なことに太平洋戦争期にほぼ活動を停止し、会堂も一九五五年頃には取り壊され、メトリカも失われた。近年、私はニコライの日記や墓石から教会の歴史調査を行っていたが、不思議な導きで横浜から司祭が来て、パニヒダを行うことになった。少なくとも戦後六〇年は教会から遠ざかっていた二つの家族に声をかけたところ、快く墓前での祈りに参加された。二家族一四人の聖名を繰り返し唱えてささげられる祈りを聞きながら考えさせられた。日本人を信徒とする最初のプロテスタント教会である横浜の日本基督公会が、その規則である「公会定規」（一八七二年）において「為死者不求於神為生者可求於神」として以来、プロテスタントは死者のために神に求めず、生きている者のために神に求め、倫理を重んじてきた。これは大事なことである。しかし、プロテスタントとして、信仰の先祖の名前を挙げて神を讃え、感謝の祈りを

ささげることはできるし、すべきであると思わされた。

ニコライは大槌に向かう道中で着飾った宮参りの人たちに出会い、「民衆にキリスト教を植えつけるにあたり、この願望を無視する手はない」と記す（一八八一年六月一〇日）。祭礼の行列を見て、除くべき偶像礼拝と思うか、伝道の契機と考えるかの違いは大きい。前述の「公会定規」には、「不拝偶像而可拝独一真神」（偶像を拝さず、独一の真神を拝す可し）とあり、これまたプロテスタントの根幹である。明治のプロテスタントは、鎮守の祭礼を攻撃する熱烈な伝道を行って拒絶され、農村を離れることになった。今日、福音主義のプロテスタント信仰に立つ教会が、三陸の山間地や沿岸部に定着できるかどうかは、日本における福音の浸透の指標である。東日本大震災後の三陸における復興支援という宣教の働きが続けられる中で、一〇〇年前のハリストス正教の伝教に触発され、遠く一〇〇年先をも見据えた歩みを続けていきたいと思う。

注

（1）中村健之介監訳『宣教師ニコライの全日記』全九巻、教文館、二〇〇七年（以下同様）。